

はくさいの需給動向

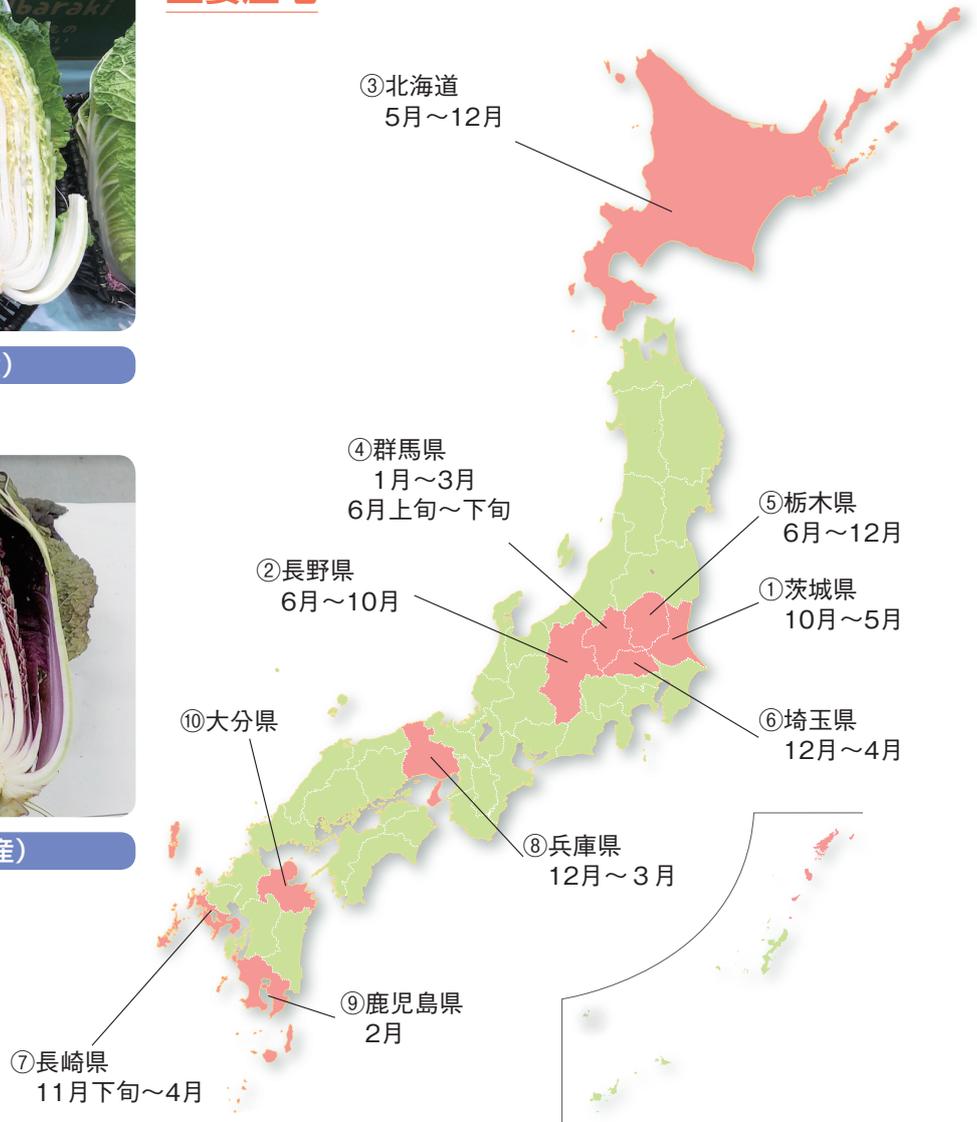


はくさい (茨城県産)



紫はくさい (山梨県産)

主要産地



資料：農林水産省「野菜生産出荷統計（平成29年産）」

注：図中の番号は収穫量の多い順番、期間は主な出荷期間を表している。

はくさいはアブラナ科の野菜で、日本には明治初期に導入され、その後、日清・日露戦争で現地のはくさいに触れた人々によって導入が盛んになった。各地に導入された種をもとに、宮城県の松島群、愛知県の野崎群、石川県の加賀群と呼ばれる三大品種群が育成され、急速に育種が進んだ。形態によって結球、

半結球、非結球の3タイプに大きく分類されるが、多く出回っているのは結球タイプである。カットしてスーパーで販売されることが多いことから中心部が黄色い「黄芯型」が主流だがオレンジ色や紫色のものも出回っている。

作付面積・出荷量・単収の推移

平成29年の作付面積は、17,200ヘクタール（28年比99.4%）と、28年に比べてやや減少した。

上位5県では、

- ・茨城県 3,370ヘクタール（同101.5%）
- ・長野県 2,810ヘクタール（同101.1%）
- ・北海道 642ヘクタール（同 97.7%）
- ・群馬県 553ヘクタール（同 92.2%）
- ・福島県 550ヘクタール（同 97.9%）

となっている。

平成29年の出荷量は、726,700トン（28年比102%）と、28年に比べてやや増加した。

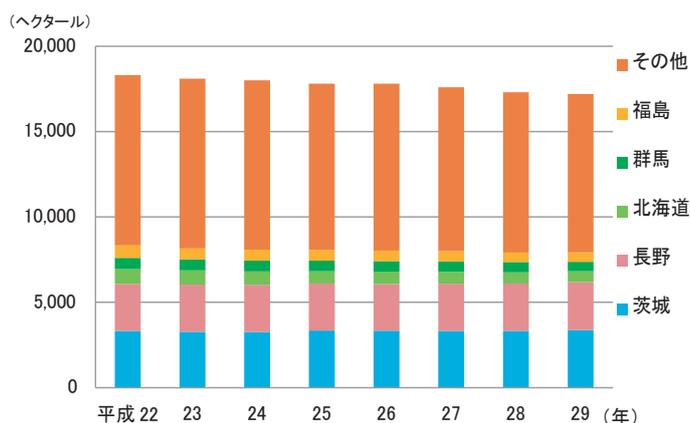
上位5県では、

- ・茨城県 229,400トン（同102%）
- ・長野県 209,400トン（同106%）
- ・北海道 26,300トン（同120%）
- ・群馬県 21,800トン（同 98%）
- ・長崎県 19,700トン（同105%）

となっている。

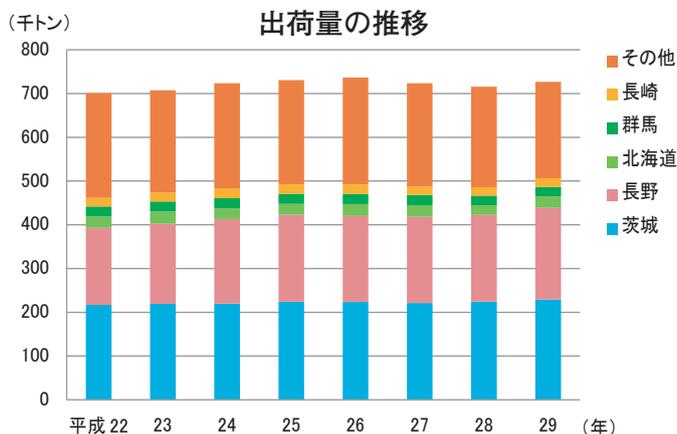
出荷量上位5道県について、10アール当たりの収量を見ると、長野県の8.37トンが最も多く、次いで茨城県の7.23トン、長崎県の6.07トンと続いている。その他の県で多いのは、和歌山県の5.95トン、岡山県の4.69トンであり、全国平均は5.12トンとなっている。

作付面積の推移



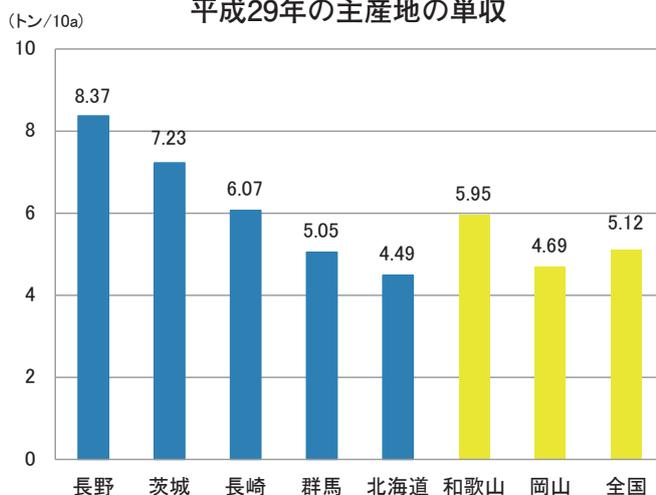
資料：農林水産省「野菜生産出荷統計（平成29年産）」

出荷量の推移



資料：農林水産省「野菜生産出荷統計（平成29年産）」

平成29年の主産地の単収



資料：農林水産省「野菜生産出荷統計（平成29年産）」

注：黄色は、出荷量上位5道県以外で単収が多い2県および全国平均。

作付けされている主な品種等

北海道から九州まで、高冷地や平地の産地をリレーしながら周年供給されるが、冷涼な気候を好み、高温に敏感な一方、寒すぎても結球しないため種子の選択、適期適温での栽培が重要になる。このため、栽培品種数は非常に多く150種以上とされている。主産県の主な品種を見ると中心部が黄色い系統が多い。

培が重要になる。このため、栽培品種数は非常に多く150種以上とされている。主産県の主な品種を見ると中心部が黄色い系統が多い。

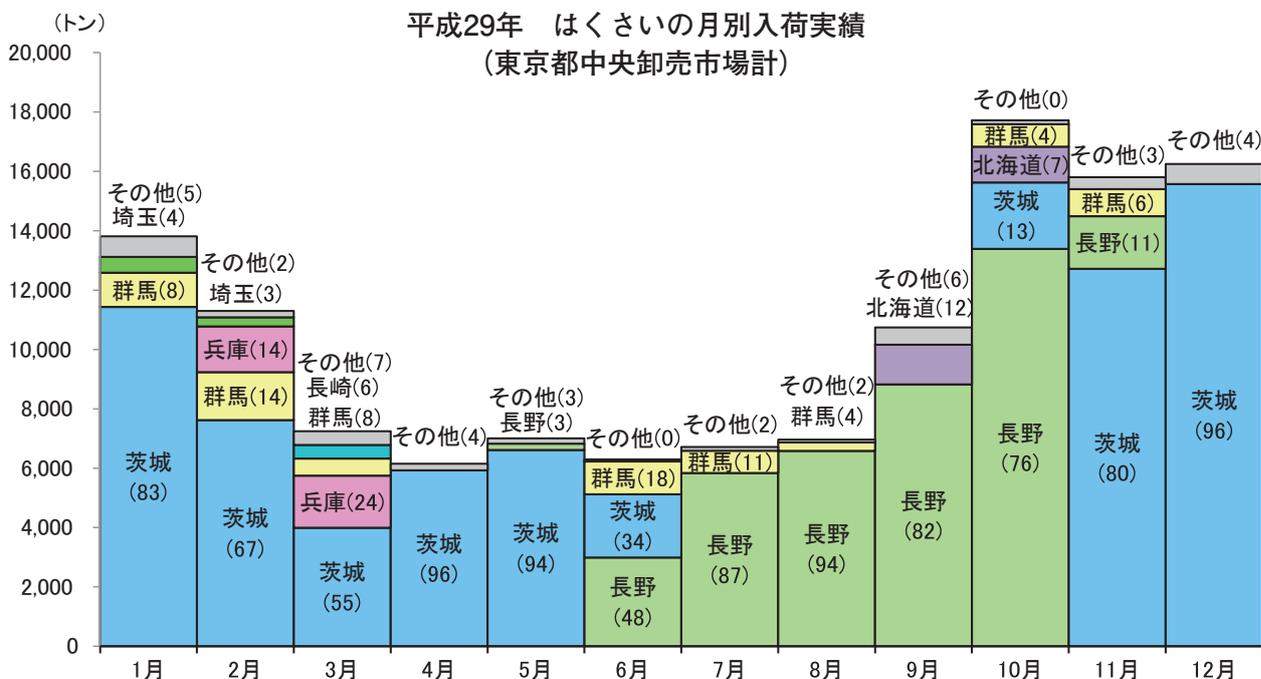
都道府県名	主な品種
茨城県	あきめき、秋理想 ^{あきりそう}
長野県	黄信 ^{きしん} 、黄愛 ^{きあい} 65、黄だて03、信州大福
北海道	晴黄、晴舞台65、黄ごころ75、黄楽 ^{きらく} 70
群馬県	きらぼし、晴黄、スーパーCR新理想、あきめき
栃木県	きらぼし85

資料：農畜産業振興機構の関係者聞き取り。

東京都・大阪中央卸売市場における月別県別入荷実績

東京都中央卸売市場の月別入荷実績（平成29年）を見ると、1～5月にかけて茨城産が主流となり、その他、近在の群馬産、埼玉産に加え兵庫産が入荷した。6月以降は長野

産が中心で茨城産、群馬産、北海道産も入荷した10月がピークとなった。11月以降は再び茨城産が中心の入荷となった。

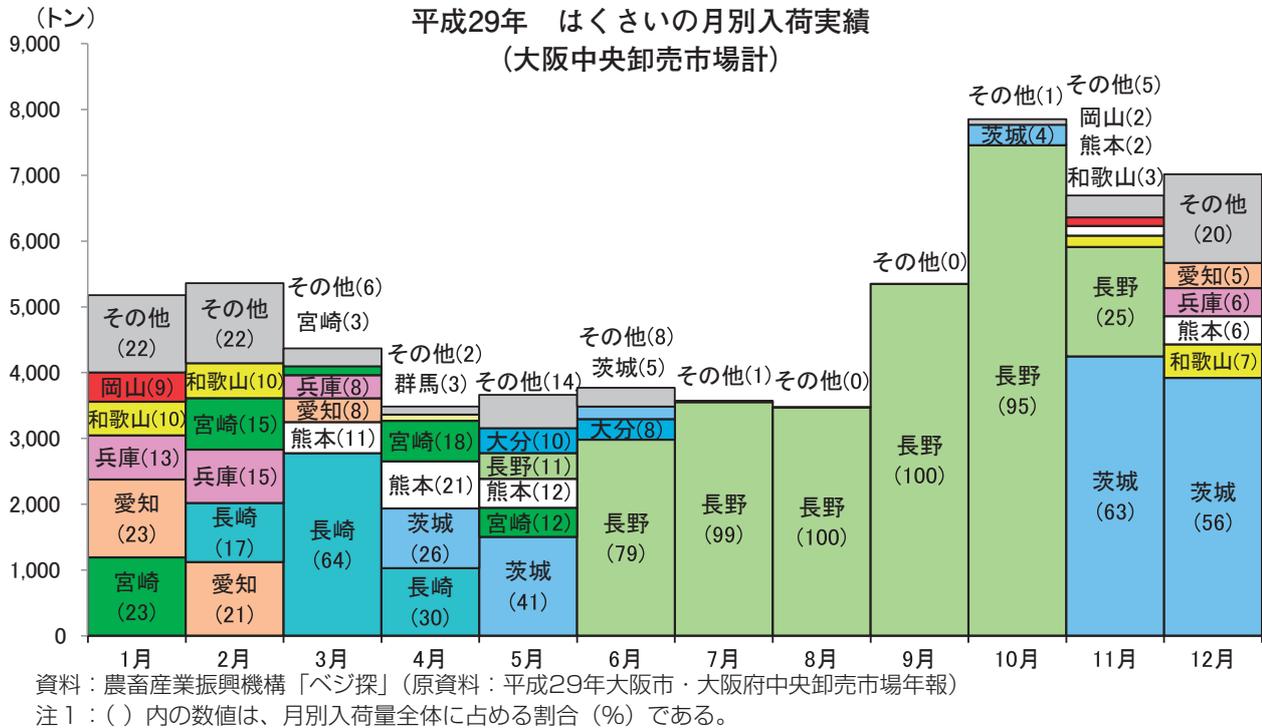


資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：平成29年東京都中央卸売市場年報）

注1：（）内の数値は、月別入荷量全体に占める割合（%）である。

大阪中央卸売市場の月別入荷実績（平成29年）を見ると、1～5月にかけては近在の和歌山産、兵庫産、岡山産、愛知産に加えて宮崎産や長崎産、熊本産、大分産といったように多くの産地からの入荷が見られる。4

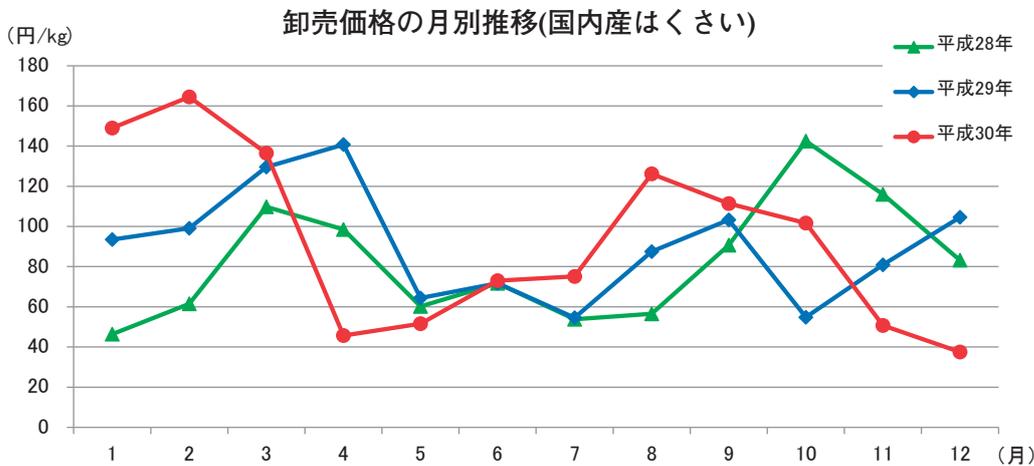
月以降、茨城産が入荷するものの、6～10月は長野産が中心となる。入荷量のピークは10月で11月以降はやや減少するものの茨城産を中心に近在産地からの入荷が見られた。



東京都中央卸売市場における価格の推移

東京都中央卸売市場におけるはくさいの価格は、年末年始に安くなり春先にかけて上昇した後、夏場の7～8月までは再び下落し、9月以降は上昇するという傾向がある。平成

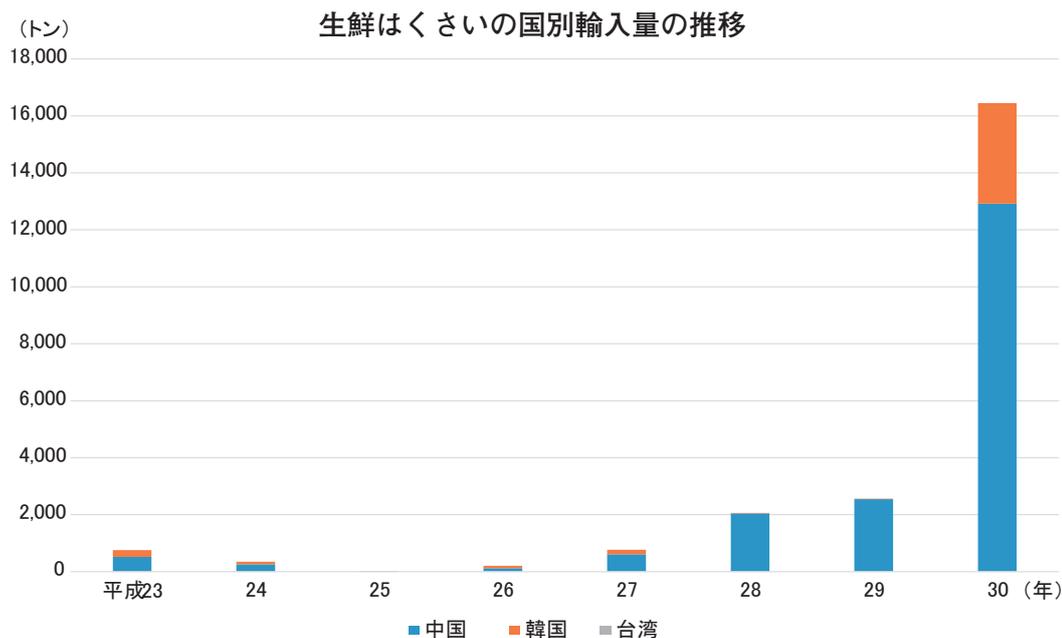
29年秋口の台風の影響により年末から翌30年の1～3月にかけては高値で推移している。



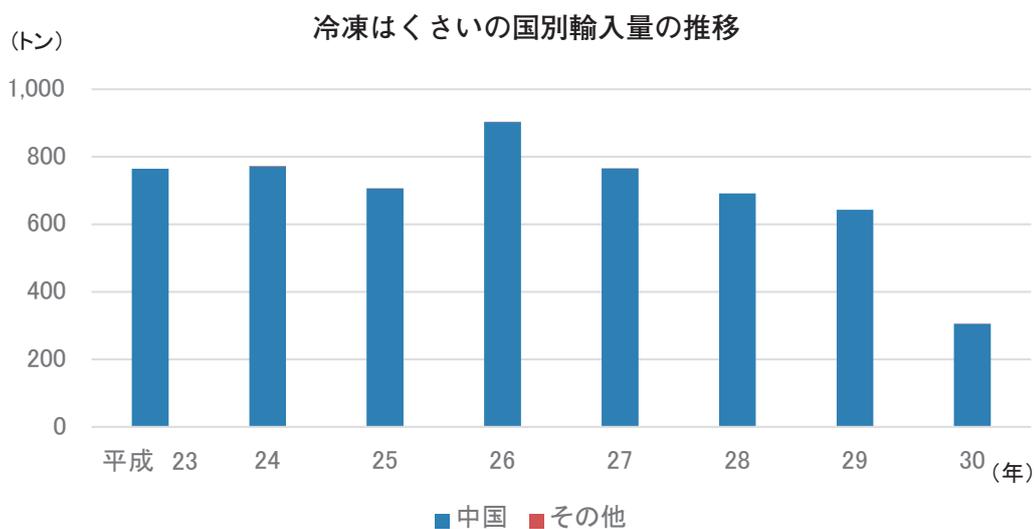
輸入量の動向

生鮮はくさいはもともと輸入が多い野菜ではないが、平成26年以降は右肩上がりが増加している。特に28年以降は台風や天候不順の影響で国産が高値だったことから、生育が良好だった中国産の輸入が進んだ。また、29年秋の台風は到来時期が遅かったため播

き直しが間に合わず、その後の低温もあって品薄となり、翌30年の1～3月は中国に加えて韓国からの入荷も見られ、加工・業務用を中心に輸入が急増した。冷凍はくさいに関しては、数量は減少傾向で推移しているが中国からの輸入がほとんどである。



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）



資料：農林水産省「植物防疫統計」

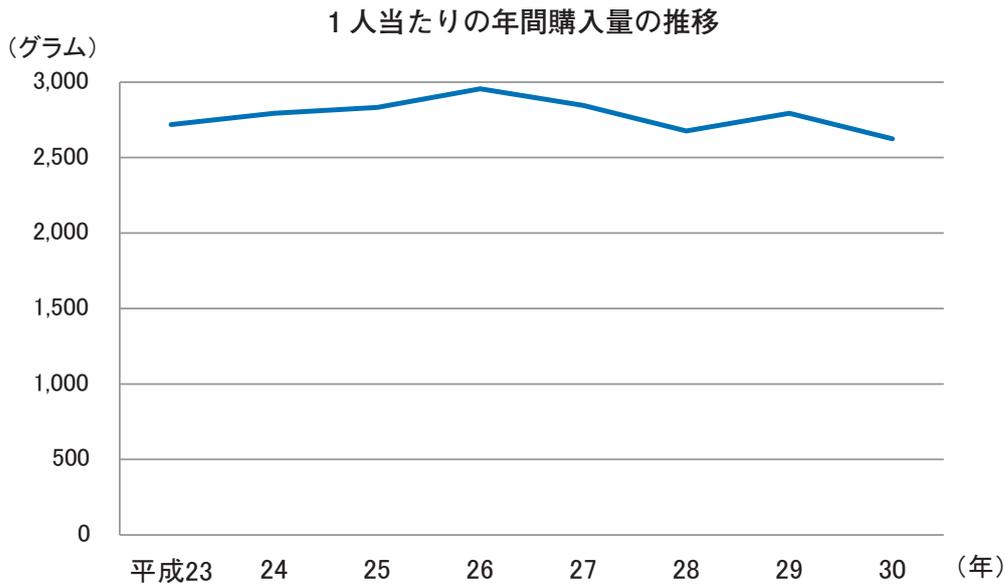
注：凍結はくさいの検査数量の数値である

はくさいの消費動向

はくさいは漬物、鍋物、炒め物など色々な料理に欠かせない素材として、米飯中心のわが国では欠かせない野菜である。

1人当たりの年間購入量をみると2500～3000グラムで安定して推移している。生産量はやや減少傾向だが、近年は葉質が柔らか

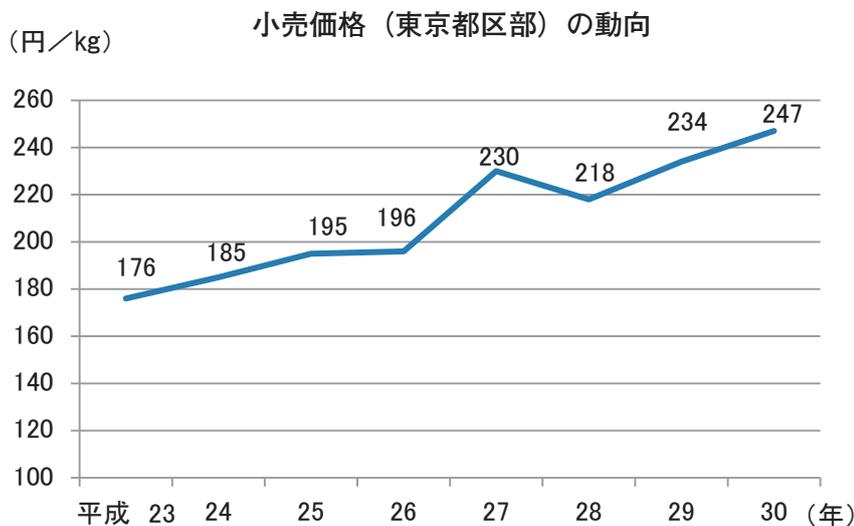
くサラダに適したタイプや核家族化に対応したミニサイズのものなども見られる。味は淡泊だがビタミンCとKが比較的多く繊維質も豊富に含まれる。加熱すればかさも減り、口当たりよく、胃腸にも優しいのでたっぷり食卓に取り入れたいものです。



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：総務省「家計調査年報」）

小売価格は、近年、上昇傾向で推移している。台風や低温、干ばつなどの天候不順によ

り国内産地からの出荷が不安定になると価格に影響が出る。



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：総務省「小売物価統計」）